福島で生きてゆくことを決意した子どもたちへの支援

～南相馬市子ども支援プログラム～

植木信一

「私は、福島で生きていく覚悟をしました。」『にいがたの教育情報』112号に掲載された、伊達市の桜木稲穂さんの言葉が忘れられません（桜木2013）[注1]。なぜなら、「避難したい方は避難しています。避難したくてもできないお母さんたちもたくさんいます。そんなお母さんたちのために、家族のために、これから生まれてくる未来ある子どもたちの笑顔のために、私ができる精一杯のことをやっていきたいと思います。」という決意に共感することができるからです。

そして、私たちが実施している南相馬子ども支援プログラムにおいても、同様の決意がこめられています。それは、福島で生きてゆくことを決意した子どもたちを対象としているからです。

1、子ども支援プログラムの背景

新潟県内には、福島県南相馬市からの避難者や子どもが多く、なかには保護者の仕事の都合により帰郷する子どもたちも少なくありません。このような背景から、私たちは南相馬市に戻ってゆく子どもたちへの支援活動が必要であると判断しました。とくに福祉的ニーズがあると判断される放課後児童クラブ（留守家庭児童）への支援は急務でした。

新潟県立大学植木研究室は、南相馬市教育委員会との合意文書（2011年5月）に基づいて、これまで約30回程度、新潟から南相馬市へ直接現地入りして、南相馬市子ども支援プログラムを継続してきました。

その他、夏休み支援プログラムや冬休み支援プログラム、春休み支援プログラムなどの特別プログラムを企画実施してきました。

2、これまでに実施したプログラムの概要

① 新潟市内避難所において福島県からの避難者のための「子ども専用ルーム」（新潟市中央区社会福祉協議会）の運営に参加（2011年3月～4月：新潟市）しました。被災者避難所となった新潟市体育館にて、子どもたちは、新潟県立大学植木研究室の大学生ユーススタッフが来ることを毎日楽しみに待っていたようすでした。

② 南相馬市教育委員会と子ども支援プログラムの展開で合意文書（2011年5月18日付）を交わし、工作あそびなどで小学生たちとかかわることができるようになりました。これにより南相馬市児童クラブの子どもと指導員を対象に支援を継続することが可能になり現在に至ります。

③「南相馬市子ども支援プログラム夏休みコンサート」（2011年8月19日：南相馬市）を実施しました。南相馬市立上真野小学校体育館にて、アートオフィスポカポカ音楽コンサートを開催し、児童クラブおよび地域児童約50人が参加しました。ワークショップ形式の音楽コンサートによって、被災後久しぶりに子どもたちに笑顔が回復したことが印象的でした。

④「南相馬市児童のための冬休み支援プログラム」（2011年12月26～28日：柏崎市）を新潟県内2泊3日の日程で実施しました。新潟県立こども自然王国に128人をお招きしました。南相馬市の小学生たちと柏崎市内に避難中の小学生たちとの交流が実現し、大学生ユーススタッフの参加により、南相馬市の子どもたちと、キラキラ大学生たちとの密度の濃いかかわりの場となりました。

⑤「春休み子ども支援プログラム『再会そして再開』」（2012年3月28～29日：南相馬市および名取市）を実施し、大学生ユーススタッフと子どもたちが南相馬市内にて再会しました。南相馬市万葉ふれあいセンターで、アートオフィスポカポカ音楽コンサートを開催し、この日のためのオリジナル曲「晴れたらいいね」を披露することができました。また、名取市の東北電力名取スポーツパークにて、屋外おもいっきり運動あそびを実施しました。これまでの支援プログラムにかかわっ

てきた大学生ユーススタッフが、初めて南相馬市へ出向き、139人の南相馬市小学生たちと「再会」し、新たな「再開」を願って交流することができました。

⑥「南相馬市夏休み子ども支援プログラム2012」（2012年8月2～4日：柏崎市）を冬休みに続き、新潟お招きプログラムとして実施しました。新潟県立こども自然王国に、215人をお招きしました。南相馬市児童クラブ指導員も冬休みに続いて参加することで、その後の自立支援プログラムを発案するキッカケとなりました。

⑦「絵本ワールドinにいがた」（2012年12月1～2日：新潟県立大学）に親子約20組をお招きしました。南相馬市上真野臨時児童クラブの子どもたちが記した震災体験や将来の夢をもとにして、新潟県立大学戸澗教授と大学生ユーススタッフが子どもたちを登場人物にアレンジしたオリジナル絵本を作成し、お招きした子どもたちにプレゼントされました。「プロ野球選手になりたいという夢を絵本にしてもらった沖沢慶太君（8）は『絵が自分にそっくり。頑張って夢をかなえたい』。母真理子さん（38）は『すてきな絵を描いてもらった。震災で野球をする機会が減ってしまったのが、少しもどかしい』と話していた。柔らかなタッチで描かれた絵本には、被災地の振興や児童の成長への願いが込められている。」（朝日新聞2012年12月2日付記事より）[注2]。

⑧「南相馬市子ども支援プログラム2013春」（2013年3月5日～7日：南相馬市）を南相馬市への大学生訪問プログラムとして実施しました。大学生ユーススタッフが、南相馬市内10か所の児童館・児童クラブへ分散して訪問することができ、子どもたちとの継続的な「またね」の約束をはたすことができました。

以上のような継続性が約束された子どもたちとのかかわりが、互いの信頼関係を育み、3年目以降の支援プログラムへの期待につながっているのです。

3、3年目の支援コンセプト

3年目の支援プログラムにおいては、南相馬市在住のおとなたちが、南相馬市の子どもたちに直接かかわる働きかけによって、子どももおとなも、ともに自らの力を発揮できる「自立支援」に力点を移すようになりました。2011年度の支援コンセプト「普段の回復」および2012年度の支援コンセプト「普段の継

続」から発展させ、２０１３年度は「自立支援」へと支援コンセプトの展開をはかることにしたのです。

そのための環境条件の関係調整が、今後も引き続き重要な支援であると考えられます。したがってこのようなプログラムの実施により、子どもたちのエンパワメント（潜在能力の顕在化）を高める効果が期待できるのではないかと考えています。

そして、自立支援の目的をはたすために、放課後児童クラブ指導員への定期的なスーパービジョンのほかに、大学生ユーススタッフが現地に向かうかかわりが必要不可欠な自立支援プログラムを計画しました。

4、自立支援プログラムの内容

自立支援プログラムは、児童館・放課後児童クラブへの「スーパービジョン」と、「大学生ユースプログラム」の二つの内容によって構成されます。

対象は、南相馬市内12か所の放課後児童クラブに在籍する子ども（小学生約５００人）および指導員（約30人）です。そのうち、スーパービジョンによる自立支援は、月1回程度、定期的に南相馬市放課後児童クラブを訪問し、工作あそびなどを導入しながら、同時に子どもにかかわる現地在住のおとな（放課後児童クラブの指導員）に対して自立支援のためのスーパービジョンを実施します。

また、大学生ユースプログラムによる子ども支援は、長期休み等を利用して、新潟県立大学の大学生ユーススタッフが、南相馬市の児童館・放課後児童クラブへの訪問活動を実施します。大学生ユーススタッフは、放課後児童クラブの現場に直接入ることによって子どもたちにかかわることができます。指導員と大学生スタッフに対して、必ず合同スーパービジョンを実施することにより、南相馬市在住の指導員のスキルアップが期待でき、同時に大学生たちのかかわりの質の向上も期待できます。

放課後児童クラブには専門の指導員が常駐しているので、大学生ユーススタッフが現場に入ることがあっても安全性は担保されます。その際には、必ず専門家による巡回指導を実施し十分なフォローアップを行います。

受入側の南相馬市教育委員会事務局とは、子ども支援に関する合意文書を交わしています。支援対象の放課後児童クラブはすべて教育委員会の管轄にあり、計

画実施にあたっては、綿密な連携と信頼関係の構築によって安全性の担保をはかることができるのです。

そして、上記の事業計画をすべて実施するためには、多くの活動資金が必要です。そのため、毎年、競争的外部資金の獲得を進めています。２０１３年度は、「住友商事株式会社活動・研究助成」と、「新潟県立大学教育研究活動推進事業（社会貢献活動推進事業）」の採択を受けることが決定しています。

5、大学生ユースプログラムによる子ども支援

直近の大学生ユースプログラムは、「南相馬市子ども支援プログラム２０１３春」（２０１３年３月５日～７日：南相馬市）として実施されました。

今後は、２０１３年夏季、２０１３年冬季そして２０１４年春季と、継続性のあるプログラムが予定されています。そうした継続性の担保によって、子どもたちとおとなたち（大学生ユーススタッフ）との「また会おうね」の約束がはたされることになります。

子どもたちにとっては、自分のことに関心を寄せてくれる身近なおとなの存在を得ることになるのです。

以下、参加した大学生ユーススタッフが残した記録の抜粋と、それらに対する南相馬市の児童館・児童クラブ指導員からのコメントの抜粋を紹介します。

（１）大学生ユーススタッフ

「何をしていても友だちとの会話、笑顔が絶えない子どもたちの姿に絆の強さを感じました。」

「知っている顔がいることの安心感や、〝また〟会えたという経験は、子どもたちにとって大きな力になると感じました。また、子どもたちの潜在的な力を学生スタッフによって引き出すことができたのではないかと思います。絶対また来ます！」

「次いつ来るの？と言ってくれた子もいるので、また来たいと思いました。」

「自分が何度も言った『またね』という言葉を守れるよう次回もぜひ参加したいと思いました。」

「私のことを知っている子どもたちは、私の名前を呼んで駆け寄って来てくれて、とても嬉しかったです。数か月会っていない程度でしたが、みんな背も高くなりおとなびた印象を受けました。」

「前回会った子どもたちが、自分のことを覚えてくれており、すぐに打ち解けたようすを見せてくれたこ

とに喜びを感じました。」

「最後にまた来てねと言われて絶対にまた来たい！と思いました。子どもたちは本当に素直で次に来るときまでもっと自分も成長したいと思いました。」

（2）南相馬市の指導員からのコメント

「皆さんが帰った後『また会えるかな？また会いたいな』と名残惜しんでいる児童が多く、（子ども直筆の）手紙も自発的に書きたいと書いたものでした。」

「事前に大学生が来館される旨の話は子どもたちにしていたので、皆楽しみにしていたようすでした。特に去年の夏に新潟プログラムに参加して顔を知っている児童は、再会を喜んでいました。『また来てね！』『元気でね』と再会を約束した子どもたち。充実した期間でした。」

「児童クラブは、限られた空間、不便な環境の中で子どもたちとつくり上げてきました。そのあたたかい雰囲気を感じていただけて、うれしく思います。子どもたちも心から楽しく過ごすことができました。子どもたちへの接し方を見て、私たち指導員もあらためて感じるものがありました。」

「子どもたち一人ひとりの要望に丁寧に応えてくれてありがとうございました。素敵なお兄さんとお姉さんに、自分の気持ちに応えてもらえたことと、その時感じた『うれしい気持ち』は、子どもたちにとって最大の支えになると思います。優しい気持ちをありがとう！また会おうね！」

南相馬市で生きてゆくことを決意した子どもたちにとっては、大学生ユーススタッフのかかわりによって、近い将来のロールモデルとしての「キラキラしたお姉さんお兄さん」として映るに違いありません。そこから子ども自身も「もしかして自分もキラキラお姉さんお兄さんになれるかもしれない」という、福島でもあきらめない将来への希望を描いてほしいと心から願うのです。

文献（注）

1、桜木稲穂（２０１３）「いま、福島から伝えたいこと―事故の被害は真っ最中―」『にいがたの教育情報１１１号』62～66頁

2、朝日新聞２０１２年12月２日記事

（うえき しんいち・新潟県立大学人間生活学部子ども学科）